

# 高齢者施設利用者における補聴器使用について

—補聴器の入手経路と使用実態—

鎌田 篤子<sup>1</sup>・神田 幸彦<sup>2</sup>・長尾 哲男<sup>3</sup>  
東 登志夫<sup>3</sup>・野田 真理子<sup>4</sup>・水本 大策<sup>5</sup>

**要旨** 高齢者施設利用者における補聴器の入手経路と使用実態を明らかにすることを目的として、長崎県内の老健3施設の補聴器を所持する34名（男9名，女25名）に対して調査を行った。約8割は本人希望の補聴器購入であったが、約3割は使用していなかった。購入先には、耳鼻科や補聴器店以外に眼鏡店や時計店、電気店などがあった。また、補聴器の異常や不備に気付かない、不備に気付いても継続使用する者はそれぞれ約3割であった。今後の課題として、適切な販売店の選択と利用者の機能に合わせた補聴器の提供やフォローを行う必要があると考えられる。補聴器の使用管理に、言語聴覚士（ST）や介護職が積極的に関わる必要もあると考えられた。

長崎大学医学部保健学科紀要 16(2): 111-114, 2003

**Key Words** : 補聴器, 高齢者, 言語聴覚士 (ST), 認定補聴器専門店

## はじめに

近年、高齢社会を迎え、我が国における65歳以上の人口は約2436万人で（平成15年11月1日現在）総人口の19.1%を占めると推計されている<sup>1)</sup>。井口らは65歳以上の約6割は聴こえに何らかの不自由を感じている<sup>2)</sup>としているため、高齢者施設利用者（介護老人保健施設とデイケアなどの併設施設を含む）における難聴者の割合も多いと推測される。

しかし、これまでSTを配置している高齢者施設が少なかったため、高齢者施設における難聴者や補聴器使用についての調査報告は少ないというのが実情であった。

今回、STを常勤で配置している長崎県内の老健3施設（真寿苑、恵風園、ケアホームクローバー）において、補聴器の入手経路、補聴器使用状況、補聴器使用上の問題、補聴器点検などの調査を行い、補聴器の入手経路と使用実態が明らかとなったので報告する。

## 対象と方法

真寿苑、恵風園、ケアホームクローバーの利用者269名、併設施設利用者258名（通所リハ198名、ケアハウス29名、グループホーム18名、宅老所13名）計527名の内、補聴器を所持する34名（男性9名、女性25名）を対象に調査を行った。年齢は、73歳～98歳で平均年齢は86.1歳であった。尚、調査期間は平成14年9月中旬から平成14

表1. 調査項目内容

①STが本人から直接聴取した項目
補聴器の種類、補聴器購入者、補聴器購入先、補聴器の購入方法、補聴器購入時の聴力検査・測定の有無、補聴器購入後のフォロー（使用方法の説明・調整や修理）
②H常生活の観察からSTが調査した項目
補聴器の使用頻度、補聴器の使用状況（操作、使用手、使用理解、管理）、補聴器使用上の問題
③補聴器業者による補聴器点検
耳栓、ボリュームや音質の調整、コード・イヤホン、補聴器本体、補聴器と聴力レベル

年10月末であった。調査票（表1）は各施設に郵送配布し、集計票のみを回収した。

## 結 果

### 1. 補聴器の入手経路

補聴器購入者は、本人24名（70.6%）、本人希望による家族2名（5.9%）、家族6名（17.6%）、近所の方から譲り受ける1名（2.9%）、不明1名（2.9%）であった（図1）。

補聴器購入先は、耳鼻科受診後購入15名（44.1%）、補聴器店での直接購入8名（23.5%）、眼鏡店4名（11.8

1 介護老人保健施設真寿苑リハビリテーション室  
2 神田耳鼻咽喉科 e n t クリニック  
3 長崎大学医学部保健学科作業療法学専攻  
4 介護老人保健施設恵風園  
5 介護老人保健施設ケアホームクローバー

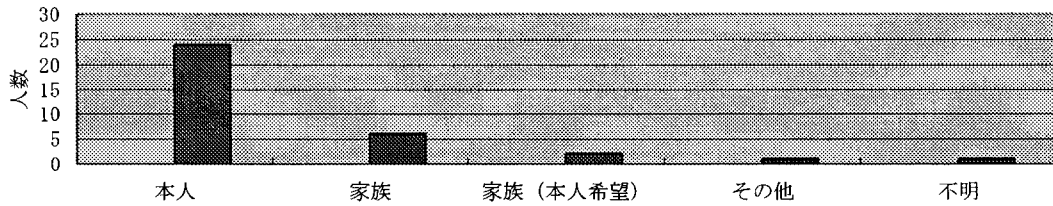


図1. 補聴器購入者

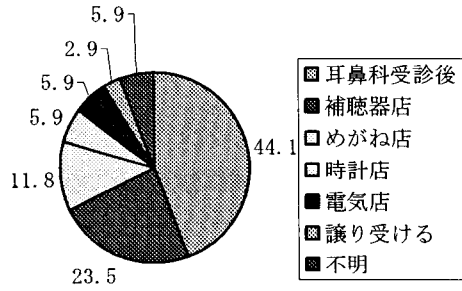


図2. 補聴器購入先

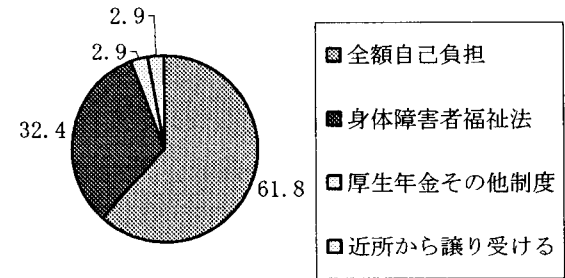


図3. 補聴器購入方法

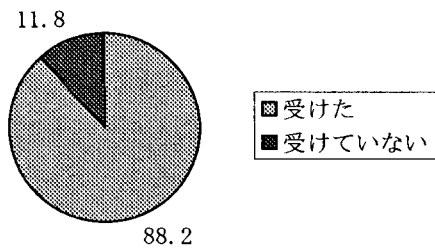


図4. 使用方法の説明

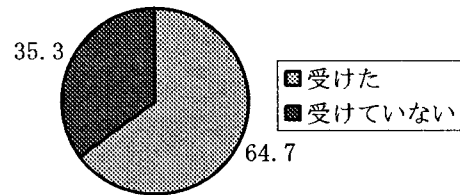


図5. 調整などのフォロー

%), 時計店2名 (5.9%), 電気店2名 (5.9%), 近所の方より譲り受ける1名 (2.9%), 不明2名 (5.9%)であった(図2)。また、補聴器店での直接購入の者のうち認定補聴器専門店での購入は2名のみであった。

購入方法は、全額自己負担21名 (61.8%), 身体障害者福祉法11名 (32.4%), 厚生年金その他制度1名 (2.9%), 近所の方より譲り受けた1名 (2.9%)であった(図3)。

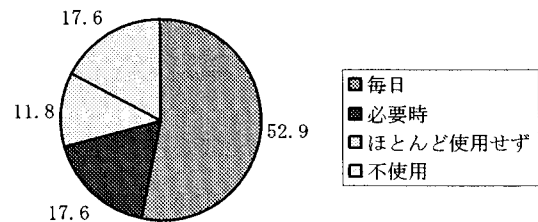


図6. 補聴器の使用頻度

## 2. 補聴器調整やフォロー

購入時の聴力検査及び測定の有無は、受けた28名 (82.4%), 受けていない6名 (17.6%)であった。

調整などのフォローは、使用方法の説明を受けた30名 (88.2%), 受けていない4名 (11.8%)であった(図4)。調整・修理を受けた22名 (64.7%), 受けていない12名 (35.3%)であった(図5)。

## 3. 補聴器使用頻度と使用状況

使用頻度は、毎日使用18名 (52.9%), 必要な時のみ使用6名 (17.6%), ほとんど使用していない4名 (11.8%)

%), 全く使用していない6名 (17.6%)であった(図6)。

補聴器の使用状況は、使用者が、利き手30名 (88.2%), 非利き手3名 (8.8%), 麻痺の為使用不可1名 (2.9%)であった。使用方法の理解が、理解可29名 (85.3%), 理解不可5名 (14.7%)であった。理解不可の理由は、痴呆4名, 全く説明を受けたことがない1名であった。補聴器の管理は、管理可31名 (91.2%), 管理不可3名 (8.8%)であった。管理不可の理由は痴呆であった。

#### 4. 補聴器使用上の問題と補聴器点検

補聴器使用上の問題は、電池切れに気付かない8名(23.5%)、スイッチが切れても気付かない4名(11.8%)、補聴器に対しての訴えがない又は訴えがあいまい10名(29.4%)、補聴器の不備に気付かず継続使用7名(20.6%)、不備に気付いても継続使用10名(29.4%)不備に気付くと使用せず10名(29.4%)であった。

補聴器点検の結果は、ボリュームや音質の調整が不適切4名(11.8%)、コードやイヤホンの故障3名(8.8%)、補聴器と本人の聴力レベルが合っていない3名(8.8%)、補聴器本体の故障1名(2.9%)、耳栓が合っていない1名(2.9%)、その他4名(年数経っており補聴器の性能が全体的に低下している1名、耳栓に耳垢詰まり出力不十分1名、スイッチ不良で断音あり1名、ダンパーの交換が必要1名)であった。

#### 考 察

補聴器は、家族が購入(プレゼント)している場合を除けば、約8割は本人希望の購入であるため、少なくとも購入時には難聴を自覚し、補聴器の必要性を感じていたと考えられる。

しかし、補聴器をほとんど使用していない、全く使用していない者を合わせると所持者の約3割は補聴器を使用していなかった。

補聴器を使用しない要因として、補聴器供給システムにおける入手経路の問題<sup>31)</sup>が考えられた。メガネ店や時計店、電気店でも補聴器を販売しており、販売店によって販売技能や設備などに差があるため、技術力や設備の整った販売店を選ぶ必要がある。だが、補聴器についての情報が少ない中、高齢者が適切な販売店を見分けることは大変難しいと推測されるため、認定補聴器専門店などの技術力や設備の整った販売店<sup>31)</sup>の情報提供が必要である。

また、入手方法として公的補助制度<sup>32)</sup>を利用した者は約3割と少なく、補助制度についての情報提供も必要であると考えられた。

調整などのフォローは、本人に合った補聴器にするために大切であるが、その様なサービスを受けた者は少なかった。

補聴器自体については、補聴器の機能や性能の問題が考えられた。補聴器は、スイッチやボリューム等、レバーや日盛り部分が小さい物が多く、高齢者にとって操作は容易ではない<sup>33)</sup>。また、高齢者が補聴器の状態を正しく理解し、異常時や電池やスイッチ切れに気付くことは難しいと考えられる。そのため、補聴器の使用や管理にはSTや介護職が積極的に関わる必要がある。しかし、ST以外の職種は補聴器についての情報が少ないと思われるため、STは他職種に対して情報提供を行う必要もあると考えられた。

今後の課題として、①認定補聴器専門店等の技術力や設備の整った販売店と連携し、利用者の機能に合わせた補聴器の提供やフォローを行う②使用や管理が難しい場合、STや介護職が日常的支援を行う③介護職や他職種に対して補聴器についての情報提供を行う等が考えられる。

#### 文 献

- 1) 総務省統計局統計センターホームページ <http://www.stat.go.jp/>; 推計人口
- 2) 井口邦雄, 他: 老人性難聴に関するアンケート調査報告, 広島医学, 50, 1108~1119, 1997
- 3) 小山啓: わが国における補聴器供給の現状と特徴, JOHNS Vol. 11, No. 9, 1259~1262, 1995
- 4) 五十嵐明美: 一般的な総合病院における補聴器相談外来の現況—老人の補聴器相談を中心に聴能言語学研究12, 10~18, 1995

# Hearing aid usage in nursing care institutions for the elderly Acquisition channels and conditions of usage for hearing aids

Atsuko KAMADA<sup>1</sup>, Yukihiko KANDA<sup>2</sup>, Tetsuo NAGAO<sup>3</sup>,  
Toshio HIGASHI<sup>3</sup>, Mariko NODA<sup>4</sup>, Daisaku MIZUMOTO<sup>5</sup>

- 1 Geriatric Health Services Facility Shinjuen
- 2 Kanda ENT clinic
- 3 Nagasaki University School of Health Sciences
- 4 Geriatric Health Services Facility Keihuen
- 5 Geriatric Health Services Facility Care Home Clover

**Abstract** 34 hearing aid users (9 male and 25 female) in three nursing care institutions for senior citizen in Nagasaki prefecture were investigated to determine acquisition channels and the conditions of hearing aid usage. In approximately 80% of the cases the purchase was at the subject's request, though about 30% did not actually use the device.

The hearing aids were bought at otolaryngology clinics and hearing aid stores as well as optician's shops, jewelry stores and electrical appliance stores. Approximately 30% of users did not notice malfunctions and defects in the device and other 30% continued to use them despite being aware these problems. The selection of appropriate stores, the choice of a proper device that suits the individual user and after purchase service are all problems to be solved. Moreover, it is important that Speech-Language-Hearing Therapists (ST) and nursing professionals take an active role in instruction, usage and handling of hearing aids in institutions.

Bull. Nagasaki Univ. Sch. Health Sci. 16(2): 111-114, 2003